

# ヨーロッパ美術の実地調査及び 諸外国の美術教育についての考察

丸山浩司  
多摩美術大学教職課程

本稿はヨーロッパ及びアメリカの美術事情と美術教育の現地調査、取材から得られたデータ分析を元に、今後の我が国における理想的な美術教育と鑑賞教育のあり方や鑑賞教育の指導法についての新たな提案を試みたものである。実地調査はあえて美術教育に特化せず、「美術」の現状を美術館視察、ワークショップ開催などを通して人的交流を中心にしながら、実践的、多角的に論考することをねらいとした。具体的には美術教育だけでなく、広く教育の先進国である欧米において、芸術としての「美術」の社会的地位は著しく高く、その延長として美術教育が充実している点に注目し、細かく記述した。欧米の美術教育が優れている最大の特徴は社会との連携にあるが、美術館を視察した際に小中学生が実地鑑賞もしくはワークショップを日常的に実施している姿を多く見かけた。本稿はこうした状況の分析と人的交流から得られた考えを元にした論稿となっている。

## 前期実地調査場所

- ・フィンランド：ユヴァスキュラ市立美術館附属版画センター
- ・ロンドン市内
- ・グラスゴー美術学校

## 協力者

ユヴァスキュラ市美術館附属版画センター主任学芸員 ユッカ・パルタネン氏

## 実地調査行程

成田からコペンハーゲン経由でヘルシンキへ。到着時刻の関係でそこで一泊し、翌朝、フィンランド国営鉄道でユヴァスキュラ市に昼過ぎに到着した。この都市は街の大半がユヴァスキュラ大学の関連施設で学園都市と言われている。また、市の方針で建築家・A・アアルトゆかりの地ということもあって芸術にも力を入れている。

研修先の版画センターは駅前のとても便利な場所にあった。ここでの約2カ月半の実地調査が始まった。このセンターは世界中からアーティストを招いて版画の制作をさせている「アーティスト・イン・

レジデンス」の施設である。私はここで版画制作をしながら、ユヴァスキュラ大学の視察を通してフィンランドの美術教育の実地調査を行った。

私の宿舎はセンターの中にあり、キッチンやシャワールームがあり、生活するには全く支障がなかった。しかも徒歩10分圏内に街の機能が集中していて、小売店舗やレストラン、銀行などがあり、あらゆる面で研修活動がスムーズに進められた。唯一、ストレスだったのはネット環境の整備だった。版画センターの中心には無線LANが設置されていたが、ゲストルームまで電波が届かず電話会社の回線で繋いだが、料金がかなり高額で情報収集に苦労した。

版画センターでの制作はまず材料の確保から始まった。事前に木版画に相応しい木材の入手が難しいことを聞いていたので、別送で版木を送るように版画材料店に手配していた。しかし、震災以後、どの国でも同様のようだが、日本からの荷物に神経質になっていて、手に入れるまでにかなりの時間を要した。その間、版画制作を断念して近所のスケッチと美術館や大学の視察を中心に活動した。そこで実感したことは、気候風土が人間の生活の様態を決定付けることである。北欧の夏は

冬と正反対。夜の時間が約3～4時間。日照時間がかなり長く、それほど暑くなくても薄着で過ごす彼らの生活から冬の過ごし方を垣間みることができた。

ユヴァスキュラ大学は理科系にシフトした大学で医療関係や化学分野に強い印象があった。それでも芸術関係の研究室も存在していて、センターの研究員でもあるポルトガル人のリタ・バルガスは大学院で美術教育、とりわけ幼児から小学生を対象とした美術教育の研究をしていたので、彼女を通して、フィンランドの美術教育の現状調査を行った。

その調査で特筆すべきはフィールドワークとワークショップの活用である。学校環境から飛び出し、国土の特質や気候風土との関連を意識しながら、幼少段階で本格的な芸術教育を実施していた。地場産業や北欧のデザインセンスをベースにしながら、社会環境をフルに活かしていたことは参考になった。また大学は国の再建との関連において、高等教育の改革に取り組んでおり、その基本コンセプトに教養教育の見直しが明記されていたことは特に印象に残った。大学は先端的な事象を扱うが、最新の情報や高等技術の開発の領域には、容易に到達出来る訳ではなく、普遍的価値を共有しながら基礎教養を磨くことが肝要である。その意味でフィンランドの大学では、すべての科学原理、つまり自然、社会、人文科学、そして人間を取り巻く事象としてのそれらを取り込んだセブンセンス(自由七科と哲学)を通して全人格的な人間形成が必要であることが強調されていた。その意味でこの大学では理系であるにも関わらず、芸術教育の必要性を謳い、大学教育の基本理念の中にはっきりと位置付けていた。これは大学の基盤をなすもので、言わば大学のインフラ整備として意味あるものと考える。ユヴァスキュラ大学の大学院生であるリタ・バルガス氏の研究は教育学の中に位置付けられていたが、芸術の本質についても言

及しており興味深いものであった。彼女の修士論文についてはまもなく入手できることになると思うので、その論文の検証を引き続き行いたい。

フィンランドではユヴァスキュラ市以外に、ヘルシンキ、タンペレ、ロバニエミ、そしてフィンランドとバルト海を挟んだ対岸の国、エストニアにも足を延ばした。特筆すべきことがあるので、項目に沿って報告する。



ユヴァスキュラ市内のスケッチ

1、ヘルシンキはフィンランドの首都で都市機能が集中しており、美術館、博物館が多くある。印象に残ったのは国立現代美術館キアズマ(Museum of Contemporary Art Kiasma)とデザイン美術館である。キアズマではアフリカの現代アートの企画展が開かれていた。これはヨーロッパを巡回している企画展であるが、北欧の地に熱帯地方の美術が展示されている事に興味を抱いた。デザイン美術館では、北欧のデザインの歴史を概観する展示が行われていた。印象としては繊維産業から派生するアパレル関連や織や染めに関係したパターンデザインに特色があり、フィンランドアートを象徴するものであると感じた。他に展示としてはプロダクト関係や各種器の造形には目を見張るものがあった。

2、タンペレはフィンランド第二の都市で、経済の

中心都市である。繊維産業の大手「Finlayson」の工場が点在し、街の中心にも大きな煙突を抱いた工場があり目を引いた。タンペレ現代博物館「VAPRIKKI」は(この博物館も工場の跡地を再利用している)フィンランド建国の歴史や国民の生活様式や大衆を含めた文化の有り様が多面的に展示されていた。この街にはトーベ・ヤンソンの数多くの肉筆画を収めたムーミン谷博物館があり、繊細で柔らかい色彩の水彩画は輝きを放っていた。

3、ロバニエミはフィンランドの北部、ラップランドの中心都市である。街の中心は北極圏ではないが、車で数分のところに北極線がある。この街では夏季に起こる現象としての「ミッドナイトサン」を体験した。24時間太陽が没しない。太陽は地平線の低い位置を移動し、影は長く足を延ばす不思議な光景をみることが出来た。また、ロバニエミ博物館「ARKTIKUM」ではラップランド人の生活や北極圏の厳しい生活の様子が写真や生活用品や衣服とともに展示されていた。

4、エストニア(タリン)

ヘルシンキからフェリーに乗り、約2時間半、バルト三国の一つエストニアに着いた。この国はロシア革命当時、一度独立を果たしたが、その後ソビエト連邦に包括された。ソ連のペレストロイカ路線の中で独立を模索したが、ソ連邦の崩壊とともに再独立を達成した。通貨は基本的にユーロだが、旧独自通貨も使用出来て、この国が発展途上の国であることを思わせる。タリンは所謂城下町で旧市街は城壁で囲まれているこの旧市街は世界遺産にも登録されている。15世紀当時の時代の様相をそのまま体験できる。旧市街のランドマーク聖オレフ大聖堂に登ると、旧市街の様子はほぼ見渡すことが出来た。中世の栄華を誇った東欧の都市は趣きのある美しい景観を見せていた。

フィンランドでの研修は材料が無事に届いた事もあり、いくつか描いたスケッチのイメージを盛り



ユヴァスキュラ大学のワークショップ



アルバ・アアルト美術館(スケッチ)

込んだ版画作品を制作することにした。作品を二点制作し、その内の一点は福島で開催した「after 3.11」展に出品した。

作品の主題としては澄んだ空気、湖に象徴される自然の美しさが際立つフィンランドのイメージを再現することにある。僅かな時間しかない「夜」に輝く星とそれらのコントラストもコンセプトに加えて、ユヴァスキュラ美術館附属版画センターで制作活動を行った。工房の上はギャラリーになっていて、滞在期間に4カ国、10人近くのアーティストと交流を持った。特に心に残ったのはスペイン人の作家である。彼らは数年前のアーティストインレジデンスの作家として3週間、ユヴァスキュラに滞在したことが縁で、グループ展に参加してした。彼らの



作品はスペインの古い街並を具象的に表現した作品や特殊な材料を駆使したコンセプチュアルな作品でスペイン現代美術の片鱗を観ることが出来た。さらに彼らは私の作品にも関心を持ち、的を射た質問を投げ掛けてくれて、充実した意見交換が出来た。

また、版画センターでは地元の作家、ユヴァスキュラ大学の大学院生を対象としたワークショップを開いた。先方の希望を取り入れて「木版画の伝統技法」を教えた。浮世絵版画の技法で水性の絵の具を使った特殊な技法を紹介した。木版画の伝統技法の中でも、最もオーソドックスな主版法という墨線版を使った浮世絵と同じ技法で作品を制作した。材料や用具への戸惑いや技法上の特徴に馴染めない受講生もいたが、概ね技法の特性を理解し、自らのセンスやコンセプトを盛り込んだ斬新な作品が次々と出来上がった。ここで感じたことは、やはり気候風土（乾燥した夏）の影響や、入手出来る素材によって作家の表現は自ずと変化し、そこに作家の生活体験や価値観が加味されて、地域独特の表現が生まれる事である。19世紀末に起こったジャポニズムの中で浮世絵版画はヨーロッパの芸術家に大きな影響を与えたが、浮世絵の画風が実は技法や素材から必然的に生まれる表現様式であることにヨーロッパの芸術家たちは気付く、それらを自らの表現に取り入れたことが特色ある作品を生み出したのである。

フィンランドは森と湖に囲まれた自然豊かな国である。さらに社会体制としては社会民主主義によって国を統治しているが、税金（消費税や所得税）は非常に高く、例を挙げると自動車取得税が100%、つまり、車を購入すると定価の二倍のお金を払う必要がある。しかし、国民から不満の声が上がらない理由はその税金の使い道に公平性があるからだ。さらに政治家の汚職が全くなく、税金は社会福祉、老後の保障、教育の無償化に充て

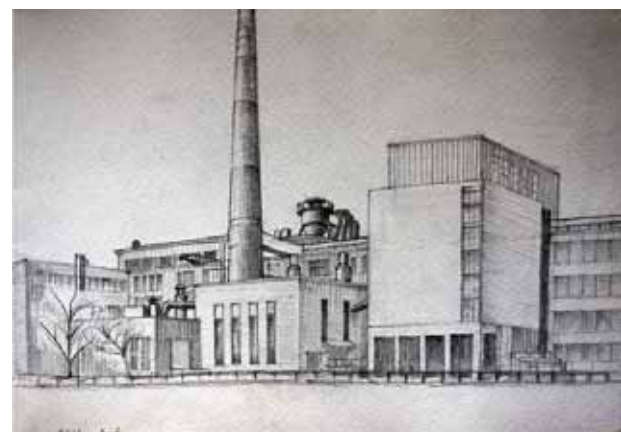
られていて、非常にスマートな印象を受ける。教育の無償化は関係者のモチベーションを高め必然的に教育環境の質的向上に繋がる。従って、各大学で行われているカリキュラムの見直しや制度改革への取組は我が国でも見習う必要があると考える。



ルシンキ・キアズマの展示



VAPRIIKKI の展示



タンペレ市内（スケッチ）

フィンランドでの研修は版画家であり、美術教育研究者でもある筆者の研究両面に大きな成果を齎した。ユヴァスキュラ大学の大学院生であるリタ・バルガス氏へのインタビューは教育立国フィンランドの斬新な教育理念を知ることとなり、数学教育や社会教育と芸術教育との関連に特に見るべきものがあつた。

小学校、中学校においては教科間の壁を取り去り、有機的に連動することで、蛸壺に陥りやすい教科教育の弊害を極力無くし、博学的で必要な教養、基礎をしっかりと学ばせているところに大きな特徴があつた。

フィンランドは A・アアルトに代表されるように建築、及びインテリアデザイン、家具デザインのレベルが非常に高く、その意味ではファインアートよりは工芸・デザイン教育に力を入れている。北欧の美術教育の特徴である「スロイドシステム」(1)にも表れているように児童、生徒の自主性の中で、創造性、機能性、斬新性等に重点を置き、さらに「労作」を最大の価値として、産業革命以降に顕著である人類の手作り、モノづくりからの乖離への批判をもとに、誰もが、手作り、ものづくりに大いに興味を持ち、そして自らの生活に色を添えることを旨としたデザイン教育に力を入れている。さらに良いデザインは自らの描写力や色や形への基礎も大事しながら、結果として総合的な美術教育に取り組んでいる。

また、ユヴァスキュラ市立美術館での研修ではフィンランドの風土をテーマにしながら作品制作に取り組む傍、伝統木版のワークショップを開催したが、これは北欧の人々に我が国の代表的な文化を紹介することができたが、そこで感じたことは技法が日本の伝統技術であっても、やはり、その国に暮らす人々はそれらの技法を個々に手なづけ、と独特の表現世界を再現していることに注目した。

この事実は絵画指導等を実施する際の参考に

なる。つまり、美術における種々の指導においては主題、技法、材料が三大要素となるが、主題に関わってはその対象にある児童、生徒の価値観や環境から何かを受け取る感性に働きかけることが、最重要ポイントになることを学んだ。



ユヴァスキュラ在住の作家 近作展



ユヴァスキュラ美術館版画センター・ワークショップ





水性木版画は日本の風土の中で熟成した技法であるので、フィンランドの気候（低温、低湿）は適していない。さらに和紙のような品質の高い紙もなく、木材の品質も製材技術が低く作品の制作は思うに任せないと感じた。

それぞれの国の「美術」はやはり国の事情、環境、国民の価値観、宗教観といったものが大きく影響し、それだからこそ、その国の文化が「美術」によって出来上がっていると言える。その意味で、美術教育の発展のためにまずは、我が国の美術を十分に理解することから始まることも学んだ。

フィンランドでの実地調査は理論と実践の両面からのアプローチになったが、他国の文化の深いところに踏み込むことが美術教育研究にはとても重要な要素にあることも同時に学んだ。

#### ロンドン及びグラスゴー実地調査

7月11日朝、ユヴァスキュラを出発、ヘルシンキ経由でロンドンに入った。ロンドンでは12年前にウィンブルドン美術学校のアラン・ウォーカーの招きで「Act of Renewal」というデジタルと従来の版画をミックスした作品によるグループ展への参加で訪れたが、その時にお世話になった菅井恭子さんのお宅にホームステイした。恭子さん、ローレンスさん夫婦はとても親切で8日間の滞在中たいへんお世話になった。ロンドンでは前回観光出来なかった重要なスポットを隈無く回ることができた。中でもイギリス美術の巨匠、ウィリアム・ターナーの特集を観ることが出来たのはとても幸運であった。時系列の展示はとても見易く、フランスの画家マネやモネに絶大な影響を与えたことが手に取るように理解できた。

ロンドンでは多摩美出身で長くロンドンで制作活動をしている塩見氏に連絡が取れ、氏が出品しているロイヤル・アカデミー・オブアーツ美術館で開かれていた「Summer Collection」展を観ること

ができた。この展覧会はロイヤル・アカデミーの会員による審査を通過した百名近い作家の作品が展示されている。販売も目的としており、版画の場合は複数用意されているので、何枚売却されたが分かるようになっている。人気のある作品は一目で分かり、コレクターの好みを知るよい機会になった。やはり具象の作品が強く、これは世界的な動きであることが分かった。展示作品は欧米でかなり評価された有名な作家の作品も展示されていて、日本にはない美術マーケットを意識していることが伺える。国、地域をあげてアーティストを支援する基盤が出来ている。当然、この展覧会は画商も眼にするので、この展覧会で名を上げ画壇にデビューするものもいる。コレクター、画商が楽しみにしている展覧会でもある。ちなみに写真をアレンジしたタブロー作品で日本人が最高賞を受賞していた。

ロンドンの街は思ったよりも整備されておらず、たばこの吸い殻などが目立ち少々残念であった。美術館としてはやはりテイトギャラリーが圧巻で、大英博物館はややコモーションイズムに傾倒しているように思われた。イギリスの栄華を垣間みることが出来ると共に、美術マーケットの動向の一斑を知ることができた。こうした経験は作品評価の視点を理解するとともに、さらに美術教育と美術の現状との比較において、美術教育のアップデートをどのように実現するか、そのヒントとなった。

ロンドンでの研修は主に鑑賞教材の実地調査である。アメリカ、NYの美術館事情と並んで、ロンドンは世界の美術の宝庫である。イギリス伝統の美術ばかりだけでなく、古代から現代へ、そしてヨーロッパ、中近東、アジア、アメリカと地域的に広くそのコレクションは集められ、特に大英博物館の作品群は圧巻である。

ここで見ることのできる作品群は文献等でも確認できるが、やはり実物を目の当たりにし、また展示方法や歴史的な解釈、その文脈はヨーロッパ

での作品に対する価値付け、その取り扱いはそのでしか知り得ないことでもある。

今回の調査時には先にも記述したが、イギリスが誇るウィリアム・ターナーの企画展、ロイヤル・アカデミーの展示のほか、閉鎖した発電所跡に建てられた、19世紀以降の世界の美術を中心にコレクションされた作品群で構成されているテイトモダンを訪れた。美術に対する深い見識に基づいて集められた作品群の中には日本で紹介されていないものもあり、新しい美術のあり方、価値基準を改めて認識することができた。



ラファエル前派の作家たち



ウィリアム・ターナー（モネに影響を与えた）

その後、ロンドンからグラスゴーに向った。ヴァージントレイنزに乗って、スコットランドのグラスゴーに着いた。目的はグラスゴー美術学校の校長

をしているAllan Walkerに会うためだ。この学校は彼のチャールズ・レニー・マッキントッシュが設計した校舎が有名で、卒業生の多くはイギリスを始め、世界中で活躍している。デザイン、建築に力を入れていることは言うまでもないが、ファインアートのセクションもあり、総合的な美術学校である。残念ながら筆者が訪れたのは、年度替りの時期で学校が休業中であつた。学内を案内された際、Print Makingのセクションもあつたので、少々残念であつた。ボランティアでワークショップを開くことを提案していたが休業中で実現できなかった。

マッキントッシュのデザインは建物の概観だけではなく、内装、インテリア、家具にまで及びその才能の多様さに驚かされた。

グラスゴーの街はほとんどの施設が徒歩で移動が可能であるが、コンパクトでありながらスコットランドのニューヨークを思わせる文化の街で、美術館や名所旧跡はどこも素晴らしかった。特に建築は独特の様式で建てられていて、重厚かつ程よい装飾が施されている。伝統ある建物と新しい建物がバランスよく調和し、活気ある街の様相を示している。また、グラスゴー現代美術館では若手芸術家の企画展が開かれていて、主に立体作品が展示されていた。どの作品もスケール感があり、迫力のある作品で斬新さも兼ね備え、古い建築とのコントラストが観るものの眼を楽しませてくれる。

グラスゴーは5日間の滞在だったが、実り多いものとなった。ただ、この街は元々製造業の街で、経済の中心である。ここのところの世界的不況の煽りを受けて失業者が多く、治安はそれほど良くなかった。社会的安定のもとに文化振興に力を入れ、マッキントッシュが生きていた時代の栄華を取り戻して欲しい。マッキントッシュに代表されるスコットランドのデザインセンスを復興させ、輝きを取り戻したグラスゴーを期待し再度この地を訪れたいと思う。イギリスで始まったArt & Crafts movement



運動がヨーロッパ、アメリカに飛び火し、それが逆輸入された時代の寵児、マッキントッシュは英国にアールヌーボーの様式を齎し、同時に古いものと新しいものの調和を目指した彼のデザインコンセプトはそのままグラスゴーに根をおろし独自の文化を開花させた功績は大きい。

グラスゴー美術学校は、1845 年グラスゴー官立デザイン学校として創立され、1853 年に現在の校名に変更された。この学校はスコットランドで唯一の公立の美術学校として世界的に有名なレベルの高い学校である。当初は建築デザインに力を入れていたが、近年ではファインアートにも力を入れている。学校の中心には吹き抜けの石膏像室があって、夏休みにも関わらず学生が熱心にデッサンに取り組んでいた。しかし、残念ながら、筆者が実地調査した校舎群は 2014 年の火災で大きく損傷してしまった。マッキントッシュのデザインによる校舎群はアールヌーボー様式をふんだんに取り入れ、また、インテリアはマッキントッシュの特徴でもあるアールデコ様式も取り入れられその特徴が随所に見られる。外観、内観全てが価値あるもののように思われた。さながらこの校舎は生きた教材として学生に親しまれていたもので、残念でならない。

この学校のカリキュラムは建築、ファインアート、デザインの三つのプログラムから構成されていて、いずれのプログラムもレベルの高さを窺わせた。

校長であるアランはイギリスの美術学校の責任者を歴任し、その手腕には定評がある。イギリスの教育システムは良い意味で全国の教育レベルの平均化を狙って、校長、学長は色々な学校を転任するのは一般的である。日本の大学もこうしたシステムを導入することが望ましいと筆者は考える。

学生の作品やアトリエ、工房、図書館等を視察させて頂いたが、とてもコンパクトに、しかも機能性を重視しており、先陣の教育施設の現況を確認できた。この施設からイギリスの最新の美術が発



グラスゴー美術学校



グラスゴー美術学校 校長室



グラスゴー現代美術館

信されていることも同時に確認できた。

#### 後期実地調査場所

ポルトガル：ポルト市版画協会（マトリッシュ）附属芸術センター

アメリカ東海岸の版画工房

ニューヨーク及びワシントン DC 市内

#### 協力者

ポルト市版画協会 会長 ジュリア・ピントオ氏

Jo Watanabe Studio

渡辺丈氏

9月20日(火)

パリ経由でリスボンに翌日の朝到着した。リスボンから昼 12 時の CP でポルトに向かった。2 時間半程でポルトのカンパニャン駅に着き、部屋を提供してくれた大家さんの出迎えを受けた。そのまま、宿舎へ行き、近所を案内してもらう。ご祖父の邸宅を相続したパトリシアは衣装デザインを手掛けるアーティストでとても親切にしてくれた。部屋は 12 畳くらいで専用のトイレ、シャワーが付いていた。近所には大きなスーパーと地場産の野菜や焼きたてのパンを売る店もあり、高級住宅街の一角にある瀟洒な家だった。キッチンも使えて何不自由のない生活が始まった。街の中心へもバス一本で行ける。しかし、このバスは本数が少なく、しかも時々間引きする。さらに渋滞が始まると普段の倍近い時間が掛かり、地下鉄に比べると便利とは思えなかった。車の生活をしていると、これが結構ストレスとなるものだ。

ポルトでの研修はサン・ベント駅近くの「MATRIZ」と言う版画協会が経営する工房での制作を中心に行った。ここでは Julia という画家で版画も手掛ける協会の会長さんにたいへんお世話になった。氏は画家としてとても有名で大学の客員教授をしている。この工房で版画の制作をする傍ら、ポル

ト大学のグラシェラ教授の好意で時々、大学にも訪れた。この大学は昨年、ワークショップを実施しており、その時の大学院生もまだ在籍していて、彼らとも交流を深めた。ポルトの旧市街もほとんどの施設が徒歩圏内にあり、制作の他、美術館、博物館などの視察をした。

ただ、ポルトでは大きな問題に直面した。手荷物以外に日本食と版画材料を入れた荷物を別送したがなかなか届かず、制作に支障をきたした。材料がリスボンに留まっている間、いろいろと手を尽くした。その間は中途半端な状態であったので、近所のスケッチを積極的に行い、オフセット技術を工房のメンバーから教わり、しばらくこの方法で制作をした。ポルトではワークショップを開催することになっていたの、材料が届くまでは実施を見合わせた。日本での原発事故が収束しないことを受けて、食料品の輸入に神経質になっていて、荷物に入っていたうどんやそうめんが輸入制限対象商品であることが判明し、約一ヶ月後にすべて処分されてしまったようだ。食料品は現地で購入可能だが、版画材料に関しては代用が難しいのでショックは隠せなかった。ワークショップの開催や自身の制作のこともあり、工房の樋口さん（武蔵美、愛知芸大出身のかつての教え子で、現在はポルトガル人と結婚して、ポルトに住んでいる）の世話でポルトのベニヤ板を入手し版画用紙も確保した。これらの材料を使って版画を制作したところ、大きな問題はなかったの、工房でワークショップを実施することになった。

ワークショップの狙いは日本の木版技法がポルトガル人にどのように受け入れられて、どのような作品が生み出されるのかを検証することだった。というのも、ポルトガルでのワークショップは今回で 6 回を数えるが、今まで日本から材料を調達して実施したワークショップでも、出来上がった作品は見事にラテンの血を感じさせる、色彩豊かで大胆な



形のものも多く、技法の制限が表現様式を規定すると思っていた筆者の観念を見事に打ち砕くものだった。しかし、今まではワークショップを目的にしたポルトガル滞在だったので、何故そのような現象がおこるのか、それを検証するだけの時間がなかった。しかし、今回は実地調査ということもあり、2ヶ月半滞在できるので、ワークショップの参加者のインタビューをとることが可能である。但し、今回はポルトガルの材料を使うため若干条件は異なるが、それでも一定のデータを得ることが出来ると考えた。

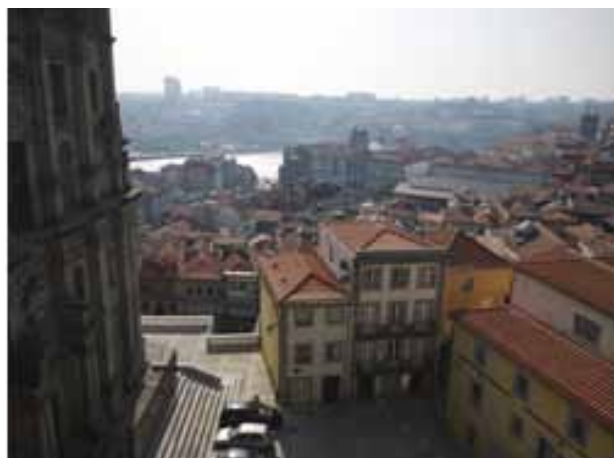
一回目のワークショップは11月5日、6日、12日、13日の4日間。週末を利用して、2週間でのワークショップ。受講生それぞれの進行の差を調整することを考慮した日程を組んだ。

参加者は10名、その内、プロの版画作家が4名、その他の参加者は絵心はあるが版画未経験であった。最初にテスト版の制作をさせて、版の重なりによって豊かな画面が作れる事を理解させた。版と版との重なりが、絵の具の混色のように多様な色を生み出すこと、そして版の重なりが形態を発展させることに気付いて欲しかった。勘が働く受講生はそのテスト版の意味するところを直ぐに理解し、テスト版を駆使して実験を繰り返していた。その後、下絵を描かせ本制作に入った。

版の重なりが版画の真骨頂だが、従来の絵画を志向する受講生は版画の規則、不自由さになかなか慣れず、モノプリント的な作品が多く見受けられた。しかし、制作を進める段階で序々に版画の魅力に気付き始め、インクのにじみを利用したグラデーション刷りのテクニックを教えたところ、魅力ある作品が次々と出来上がった。順調に技法習得が高まるにつれ、ポルトガル人特有のイメージや色彩、有機的な形態の面白さが現れワークショップは終盤盛り上がりを見せた。

ワインとチーズ、そして海の幸を楽しむ豊かな生

活感を持つ国民性、そして、ファドの中で歌われている情感溢れる人間観は作品を饒舌なまでに内容豊かなものしていると思われた。作品は生命感に満たされていた。



Matrizでのワークショップ



Matrizでのワークショップ



受講生の作品



グラデーションを活かした木版作品

「MATRIZ」でのワークショップに続いて、ポルトガル北東部、スペイン国境に程近いセルベイラで講座を持った。参加者はスペイン人2名を含む10名ほど、それに会場提供者のヘンリックさんと奥さんのマルガリータさんも参加した。ヘンリックさんはセルベイラ・ビエンナーレの創始者で画家である。受講生の一人、リカルドさんは中学校の美術の先生でとても熱心に制作していた。ポルトでのワークショップに比べると、参加者の殆どがアーティストなので指導の要点を直ぐに掴み独自の世界を構築していた。版の刷りに使うプレス機の調子が悪く、トラブルがあったものの4日間の講座としては完成度の高い作品が多く見受けられた。ヘンリックさんも「今回の講座は技法と参加者の芸術性が相まってどれも素晴らしい作品が生まれた、有意義なワークショップであった」と語っていた。セルベイラはポルトガルの片田舎ではあるが、

ビエンナーレの開催が町興しの一助となっており、街の至る所に彫刻やポスター類が展示され文化豊かな地域性を提示していた。我が国でも最近、このような傾向を見かけるが芸術を志す者として心強い。欲を言えば芸術に投資する資産家や政府の援助があれば、芸術は人間性復興のシンボルになると確信している。

ここで出会った、リカルドやスペインの作家たちとの交流はいずれ違う形でも文化交流の礎になると筆者は期待するものである。

ポルトガルでの実地調査はこの他、ポルト大学のグラシエラ教授へのインタビューを通して、美術学部でのファインアート教育の進め方や学部全体のカリキュラム体系を調査した。このところの大不況で学生数が激減し、教育体制に支障をきたしているようだが、それでもポルト市内に多くの施設を持つこの大学は芸術の普及に力を注いでおり、一般の人たちが現代の美術に親しめるように環境整備を進めている。また、社会人教育を利用して、学生の社会への適応力を高めるために講座設定に工夫を凝らし、クラス編成や他国との交流を通して多様な教育を実践していた。カリキュラムに関してはここでも学生の学力、そして社会人としての基礎的能力を確保するために、教養教育の重要性を盛んに訴えていた。日本の例にもれず、ここポルトガルでも、新入学生の学力低下は目に余るほどで、その点、カリキュラム編成にかなり苦慮していた。ここで調査したことは多摩美の改革にも応用出来るものである。と言うのも、所謂リメディアル教育の実践を通して、高校教育までの学習レベルと大学教育の基礎教養教育を段階的に合致させるように工夫が凝らされていたからである。

ポルト大学は13学部を擁するポルトガル最大規模の大学で学生数は3000人を越えている。法学部、経済学部、医学部などの学部の他、スポーツ科学部やファッションに関係するユニークな学部が



ある。芸術関係では美術学部と建築学部があり、特に美術学部はこの大学で最も古い学部である。

このような状況から、リベラルアーツへの対応が充実しており、学部間交流も盛んで芸術教育と教養教育の関係を意識している姿を窺うことが出来る。国の非常事態もあって、卒業生は仕事を求めてポルトガル語が通用するかつての領土であるアフリカのアンゴラや南米ブラジルに渡る学生が少なくないが、やはり国の立て直しには人材育成が大切であることから、大学教育の充実にはかなり力を注いでいる。美術学部が大学全体の基礎教育の拘わっている状況は大学教育の一つの在り方を示していて、とても興味深かった。

翻ってポルトガル作家の表現内容の豊かさは、日本人にはない情熱的なラテン民族の血が作品に命を吹き込んでいるように思われた。食事や装飾品に拘りを持ち、古きものと新しきものの調和を大切にしながら、日々の生活の中で自分たちの生き様を見事に表現している。芸術を尊重し、大航海時代から受け継がれた冒険心と自然への畏敬の念がポルトガル文化に多様性を齎しているのである。

私は研修を通して様々な経験をさせて頂いた。その中で一番印象的だったのは、彼らは人的交流を大切にしながら、他者観を確実に抱き、人のこのころの機微を掴み、充実した社会を作ることを願っている点にある。筆者は、現在の不況下のポルトガルにあっても、彼らの生き方は必ずや復興の道を発見すると確信している。いわゆるラテン系民族に特徴であるポジティブに物事を捉える国民性は生き方や食生活、ファッションに色濃く現れ、目を見張るものがある。現地調査中に盗難に会い、現金、クレジットカードを失った時も直ぐに有料のワークショップを開催することを提案し、それを間髪入れずに実行するという極めて前向きな対応をしてくれた。これこそがラテン民族の強みである。そうした国民性は作品にも顕著に現れ、写真にもあるよう

に、おおよそ日本人ではイメージできない色使いや画面構成からは学ぶべき点が多い。細かいルールには囚われない自由で躍動する作品群は今後のポルトガルの現代美術の隆盛を思わせ楽しみである。

セルベイラはスペイン国境にほど近い地域でワークショップの参加者の中にはスペイン人もいて、国民性の違いを確認した。個人的な側面もあるかと思われるが、概して作品の印象は精緻で、構築性の高いものである。ポルトガル人が「動」とすればスペイン人「静」ということになるうか。美術はやはりそれまでの生活や環境を反映するものである。この辺りは美術教育において、その指導や資料収集といった側面に大いに影響するものである。



ワークショップの参加者



ポルト大学美術学部



セルベイラのワークショップの作品 1



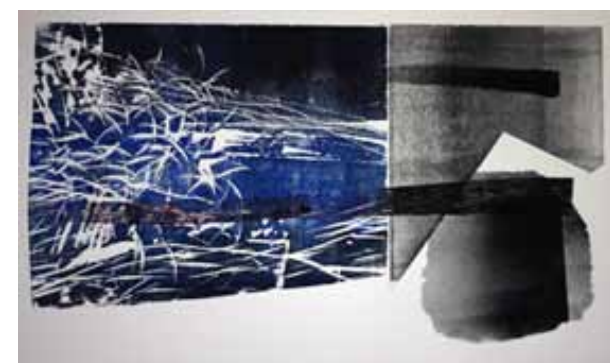
セルベイラのワークショップ 1



セルベイラのワークショップ 2



セルベイラのワークショップ 3



セルベイラのワークショップの作品 2

## アメリカ東海岸現地調査

ニューヨーク

ワシントン DC

成田より直行便でニューヨーク・ケネディー空港に着いた。ニューヨークは5度目の訪問なので、慣れているつもりだが、やはり土地勘というものには直ぐに戻るものではないことを実感した。荷物が大きいのでタクシーでブルックリンの WATANABE STUDIO に向かった。倉庫を改造した工房はとても広く、版画制作に必要な設備が揃った立派な施設である。私が前回の研修でお世話になった時は「ソル・ルウィット」作品を手掛けており、版画工房としては隆盛期にあったが、ソルが死去し、さらに美術マーケットの不況の煽りもあり、停滞感を否めなかった。工房ではチャック・クロースのエディ



ションをシルクスクリーンで制作していた。ちょうど、その作品の仕上げ作業中だったので、それらを身近に鑑賞できたことは幸いだった。前半の一週間はこの工房の代表である渡辺丈さんのお宅でホームステイさせてもらった。お宅はブルックリン南西の閑静な住宅街の倉庫を改造した、日本で言うところのデザイナーズマンションで、作りはお洒落なニューヨークを象徴する建物である。

丈さんの奥さんであるさちさんは、かつて「ソル・ルウィット」の右腕と言われたウォールペインティングの名手で、アメリカのコンセプチュアルアートの一翼を担っている人である。この二人に歓迎されて前半のニューヨーク研修は無事に始まった。

丈さんとは最近の美術状況の話しやアメリカ美術の今後について話し合った。丈さんの意見はやはりスーパースターが出現しないとどの業界でもそうだが、盛り上がり期待できないことを強調していて、現在、中国の若い女流画家を育てようとしている話しは興味深かった。その一方で美術関係者においても若者のサラリーマン化がアメリカでは著しく、大きな経済成長が期待できないこと、巨大なマーケットがあるにも拘らず、かつてのアメリカンドリームが期待出来ない話しには些かショックだった。このようなときに美術に何が出来るのかを考えさせられた。

二日目はさちさんと一緒にディア・ビーコンと言うニューヨークから北へ電車で一時間程のところにあるかつてのナビスコの工場跡に建てられた巨大な現代美術センターに行った。ソル・ルウィットのウォールペインティングのコンセプトに基づいた描き直しの作業(限りなく制作と言ってよい)に参加させて頂いた。ソルの遺稿を基にその指示に忠実に作業する様は言葉には出来ない緊張感が漂っていた。その現場に立ち会えたことは所謂コンセプチュアルアートにおける「発注芸術」の現場に立ち会えたことになる。美術教育における現代美術の取り

扱いについては、その価値基準や普遍性についての研究が十分とは言えない面がある。しかし、美術教育は歴史的に価値あるもの、所謂名作ばかりを取り扱うだけでは教育のダイナミズムを望めない。その意味では現在の美術を積極的に取り入れ、生きた美術を紹介したい。その意味で今回の経験は今後の美術教育における鑑賞教育の取り扱いの研究に多大なる成果を齎すものである。

また、この期間、ディア・ビーコンは休館中であつたので、現代美術の殿堂を独り占めにして鑑賞できたことは言わば奇蹟のように思われた。

ウォルター・デ・マリア、イミ・クネーベル、ドナルド・ジャッド、サイ・トゥオンブリー、ダン・フレビン、そしてソル・ルウィットらの作品があたかも私を出迎えているようだった。かつてのアメリカ美術の隆盛を垣間みたようでもある。60年代、70年代から続いたアメリカ美術の隆盛が再び訪れることを願ってやまない。環境が美術を作る典型のように、巨大な展示スペースはアメリカ美術のスケール感を見事に体现していて壮観であった。ここで出会った作品群は大学の講義での貴重な資料となる。研修の目的の一つである講義内容の充実に直結しているように思われる。アメリカの現代美術はその代表作は日本でも紹介されているが、前記の作家群はそれほど多くは紹介されていない。こうした作品群と作品の背景にあるものを鑑賞教材としていづれまとめたい。

翌日からはニューヨークの主要美術館をやはり押さえておく必要を感じたので、まず MOMA を訪れた。パーマネントコレクションに目立った入れ替えはなく、残念なことにデ・クーニングの企画展が終了したばかりで、主だった収穫はなかった。しかし、撮影は可能なので、性能のよいデジカメで殆どのコレクションを写真に収めた。これも貴重な講義資料となる。グッゲンハイム美術館はその建物がフランク・ロイド・ライト設計の奇抜な建物であるこ

とから、完全に観光地化されていて、訪れたのが日曜日とあって、いささか興ざめしてしまった。それでもカンディンスキーのミニ回顧展を開いていて、代表作に出会えたことは幸運だった。

ロンドンでの実地調査の項目でも書いたが、実物を確認し、また展示方法等を参考にしながら、鑑賞教材の作成、そして指導方法、作品の選択などをこれらの映像資料をもとに大学での講義で実際に紹介した。やはり現地取材の強みは講義に厚みを齎し、鑑賞教育の典型を示すことを可能にした。



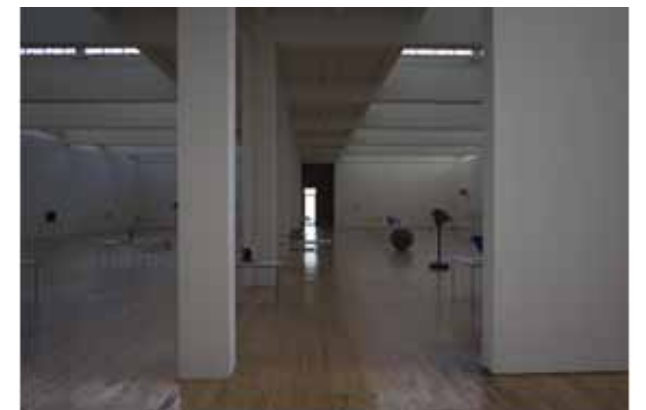
Jo Studio



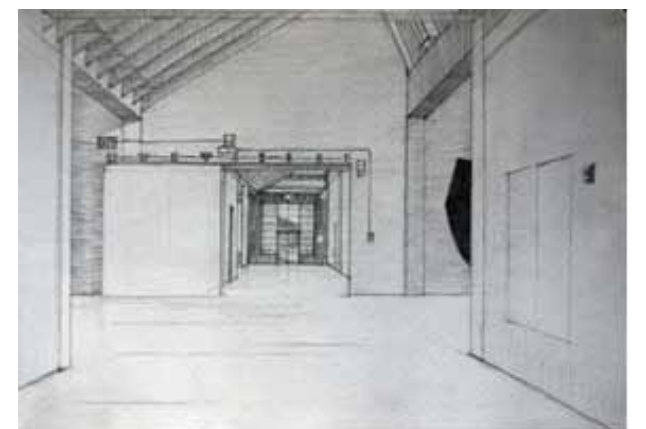
ソル・ルウィットのウォールドローイング



ソル・ルウィットのウォールドローイング



ディア・ビーコンの展示室



展示室のスケッチ(右に見えるのはイミ・クネーベル作品)

続いて、マンハッタンのペン・ステーションからアムトラックでワシントン DC に向かった。平日ということもあり、電車は空いていた。3 時間程で到着。ワシントンではスミソニアン博物館群の制覇と、フィリップコレクションの調査が主な目的である。アメリカ合衆国の首都にも拘わらず、非常にコンパクト



な都市なので、出来る限り多くの施設を回りたい。

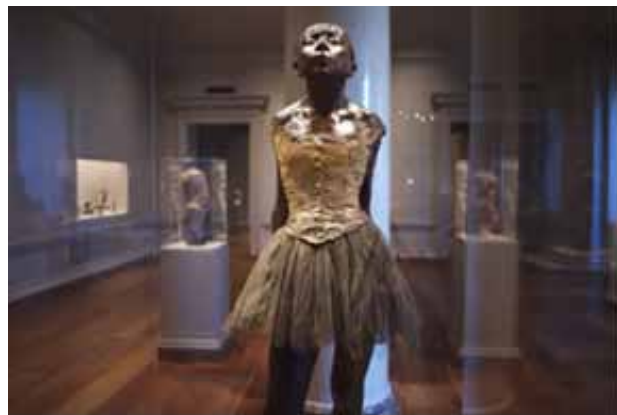
最初にナショナルギャラリーを訪れた。作品の撮影が許されているので、講義資料のために大量の写真を収めた。会場に入っていきなりドガの彫刻が目に入った。本物のチュールを付けたバレリーナの少女像である。この美術館のコレクションの質の高さを予感させた。ナショナルギャラリーの本館では西洋美術史を彩ったルネッサンス以降の作品群を鑑賞することができた。レオナルド・ダ・ビンチ、ラファエロ・サンティ、エル・グレコ、ヒエロニムス・ボス、シュゼッペ・アルチンボルト、フランシスコ・デ・ゴヤ、レンブラント・ファン・レイン、ウィリアム・ターナー、そしてヨハネス・フェルメール等々の印象派以前のイタリアルネッサンス、スペイン美術、オランダやイギリスを代表する作家の名作が一堂に集められていた。その他、アーリーアメリカンの絵画や、エドワード・ホッパーやアンドリュー・ワイエスらアメリカ美術を確固たる地位に押し上げた作家の作品が目を引きいた。

アメリカ美術に関しては、建国以来の先進国としての誇りを感じさせるようなアメリカ建国史を意識した展示となっていた。

本館の東側には彫刻の庭があり、アレクサンダー・カルダーやソル・ルウィット、トニー・スミス、デイビッド・スミスらの現代彫刻が設置されていた。本館地下の宇宙船内を思わせるコンコースを渡ると1970年代後半に建てられた新館がある。ここではリチャード・セラのミニマリズムを代表する鉄の彫刻と、抽象表現主義の代表作家であるロバート・マザウェルのカリグラフィーを思わせる巨大絵画の出迎えを受ける。天窓から自然光を取り入れた斬新な建物には巨大なカルダーのモビールがつり下げられ、展示室にはアメリカの戦後美術を中心に抽象表現主義やミニマリズム、コンセプチュアリズムの作品群が数多く展示されていた。代表的なものとしては、フランク・ステラ、ジャスパー・ジョーンズ、

ロバート・ラウシェンバーグ、アンディー・ウォーホルなどが異彩を放っていた。その他、ヨーロッパの現代美術としてはアンリ・マティス、パブロ・ピカソ、ヴァン・ドンゲン、モーリス・ヴラマンク、ワシリー・カンディンスキー、コンスタンティン・ブランクーシやアルベルト・ジャコメッティの彫刻、ピエト・モンドリアン、サルバドール・ダリ、ゲルハルト・リヒターの作品も鑑賞することができた。この他、目を引く展示としてはジョージア・オキーフやサイ・トゥオンブリーの作品が重点的に複数展示されていた。アメリカ美術を象徴する作品として位置付けられている。

ヨーロッパ美術としてピエール・スーラージュやジャン・デュビュッフエらも現存する作家として畏敬の念をもって展示されていた。



エドガー・ドガの彫刻



ナショナルギャラリー展示室



ソル・ルウィットの彫刻

ワシントン DC のナショナルギャラリーは世界中の名品を集めた美術館として大英博物館やメトロポリタン美術館、ルーブル美術館等と充分肩を並べることのできる充実した美術館であると感じた。

スミソニアン博物館群としては宇宙航空博物館、ハーシュホーン美術館、アメリカ歴史博物館を順次視察した。これらの博物館では他分野の見識を深めることが出来た。歴史博物館や宇宙航空博物館はアメリカ合衆国の威信を掛けた展示になっていて、かなり見応えがあった。

ワシントンでは最後にフィリップコレクションを訪れた。ここで一番印象的だったのは何と言ってもモーリス・ルイスとサイ・トゥオンブリーの大作である。ルイスの作品はニューヨークでも見かけるが、代表作にはなかなか出会えなかった。しかし、彼がワシントン DC に程近いボルチモア出身ということもあって、かなり質の高い作品が数点展示されていた。この他にオーギュスト・ルノワールの代表作、パウル・クレアの油彩画、ジョルジュ・ルオー、アンリ・マティス、ピエール・ボナール、ピエト・モンドリアンなど鑑賞することが出来た。私立の住宅街にある美術館としては非常に見応えがある。

ワシントン DC はアメリカの首都だけあって、ニューヨークとは趣の違う町並みを感じさせ数々の見応えのある展示を目の当たりにした。展示はファ

インアートばかりではなく、アメリカの歴史をコンパクトにまとめたアメリカ歴史博物館は特筆すべき施設で、アメリカ建国以来の歴史的産物が展示されていた。特に興味を惹いたのが産業革命時の種々の発明品である。これは工芸科教育の内容を考える時に貴重な資料となった。産業革命と伝統工芸の関係性において、人類がどのようにものづくりの環境変化に対応してきたかを理解することができた。イギリスの Arts & Crafts movement との関わりにおいて、生活の利便性と芸術性の間でどのようにアメリカの人々がものづくりを捉えていたかは、その個々のデザインワークに反映されている。

また、ファインアートに関しては各展示施設が広大な敷地に設置されている関係もあって、巨大な作品が多く展示されていた。所謂、エンバイラメントアートが目を引きいた。さらには各時代の代表作も多く鑑賞する機会に恵まれた。

1月27日にニューヨークに戻った。翌日はワールド・トレード・センターに行った。2001年9月11日の出来事は鮮明に覚えているが、その爪痕は僅かに感じられる。ここでは復興の象徴としてワンワールド・トレード・センターが現在建設中である。

最後の研修として、ニューヨークで活躍するエイプリル・ヴォルマーと再会しニューヨークの美術事情の解説を聞き、また有力な画廊をいくつか紹介して頂いた。

ニューヨークとワシントンでの研修は美術館の視察という形をとったが、ディア・ビーコンでは学芸員と面識が出来、また閉鎖中の美術館でソル・ルウィットのワールドローイングの描画作業を間近にみる事が出来たことは今回の実地調査の大きな収穫である。さらにモーリス・ルイスやサイ・トゥオンブリーらの純粹抽象の見直しが始まっていることも興味深い。2000年代に入ってから美術はネオ即物主義の影響かと思われるが、写真や具象絵画、アニメーション、漫画が全盛である。しかし、



その一方で良い意味での芸術主義的な傾向、絵画の可能性への回帰が一つの潮流を成しているように思われる。今後の美術が第三世界の状況や社会不安、経済破綻などのマイナス要因をどのように克服しながら、美術の再生を図ろうとしているのかは、美術の先進国アメリカの動向を抜きにして語ることは出来ない。そのアメリカで純粹抽象の見直しが始まっていることは、画家として将来に対して明るい兆しを発見した想いを抱くと共に創作意欲を掻き立ててくれるものがあった。

今後の純粹美術としての絵画が、その地位を確立する様子を私自身が目の当たりにしたことがアメリカ研修の最大の成果である。

#### 最後に（まとめ）

この実地調査を通して数多くの異国の文化に触れることが出来た。これは一言では言い尽くせない大きな成果を私自身に齎してくれた。

それは何よりも世界の経済システムが破綻し、人々の心からゆとりを奪い、さらに我が国の震災、そして未だ解決を見ない原発問題の中で人類の生き残りの道を私たちが模索するこの時期に、研修の機会を私自身が与えられたことにある。しかし、私は今回、芸術家として何が出来るのかを同時に悩んだ事も事実である。情報のボーダーレス化が人間の生き様までも変えようとする現代にあって、やはり人が直に触れ合うこと、そして素材が齎すものの温もりを忘れないこと、これ以上に大切なことはないことを、この実地調査を通じて私は実感した。

#### 【参考文献】

(1) 横山悦生「オットー・サロモンのスロイド教育のテーゼ」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第 53 巻 1号



ナショナルギャラリーのコンコース



ハーシュホーン美術館



リチャード・セラ



モーリス・ルイス 150 号



カルダーのモビール



アメリカ航空宇宙博物館



コンスタンティン・ブランクーシの彫刻



建築中のワンワールドトレードセンター